

駿河竹千筋細工

静岡近辺で良質の淡竹（はちく）が産出され、これを使って各種の竹細工が古くから作られ「駿河竹細工」と称されていました。

寛永年間（1624～1644）、江戸において籐編笠が流行しましたが、高価で一般向きでなかったため、その代用として駿府草深の同心たちが研究し、竹ひごの笠を作ったといわれます。これは値段も安価でしかも武士の好みに合ったため、江戸で飛ぶように売れ、また旅人からも重宝がられ、駿府の特産品として知られるようになりました。

しかし、単なる竹細工から今日のような精巧なものになったのは、天保11年（1840）に菅沼一我によって伝えられてからです。

竹細工が産業としての基礎を固めたのは、明治維新後江戸から駿府に移住してきた旧幕臣たちが生計をたてるため、内職として竹細工を始めてからでした。明治初年には鷹匠町城端に土族授産場が開かれ、外国向けの笠の製造をしていました。

維新後土族の内職から本職になった竹細工の特徴は「もみひご」といって、竹の肉を薄く割り、十数本を重ねて強く結び、小口に切り口を刻みへらに当てて揉みながら千筋よりさらに細いひごを作り、盃や盆などを明治20年（1887）頃まで作っていたようです。

明治30年（1897）頃には竹千筋細工が、その種類も多く主要な製品となり、明治34～5年には、木材の挽きもの木地に、二ミリほどの細ひごを網代に編み、輸出品として長期にわたって注文に追われるほどの好況であったようです。輸出による好況は日露戦争後も続き、明治37年（1904）に中国からの製品に漆が塗ってあったことにヒントを得て、虫がつかない、かびが生えたりするのを防ぐ目的で、竹細工に漆を施すようになりました。

明治末には、絹布を張り込んだ電灯の笠や輸出用鳥籠が盛んに作られていました。大正初期になるとデザインや技術が向上し、代表的商品である南京丸盆や六角盆が作られるようになりました。

このように古い伝統と卓越した技術を持つ静岡の竹細工は、明治以来度々博覧会に出品され、美術工芸的な優良品や名品が製作され、特産竹細工の名を高めてきました。明治6年（1873）にはウィーン万博に鳥籠、菓子器などが出品され、美術工芸品として高い評価を得ました。大正13年（1924）にはパリの工芸美術装飾品万国博覧会で鳥籠が銀杯を受領しました。素晴らしい竹細工製品は明治、大正、昭和各時代に天皇家からお買い上げを賜ったり、また献上されています。

明治以降竹細工業界に携わってきた人達の大部分は、飯田竹次郎の指導を受けて今日にいたっており、そういった意味では飯田は静岡竹細工の先駆者でありました。

竹細工の組合が初めて設立されたのは明治42年（1909）で、竹千筋細工の専門業者が40戸に達したため業者が組合の必要を感じて設立されたものです。第二次世界大戦後、組合員数が減少し、組合事業が振るわず、昭和24年（1949）5月解散しています。

現在の「静岡竹工芸協同組合」は、昭和25年（1950）1月15日任意組合として発足した「静岡竹器組合」から発展したものです。

以後、竹千筋細工の伝統技術は連綿と継承され、昭和51年（1976）に、通産大臣から「伝統的工芸品」の認定を受け、行燈、電灯笠など住空間への商品開発を意欲的に展開しています。

全国的にも別府や北陸地方などの竹製品産地がありますが、それらの産地と静岡の竹千筋細工を比べた場合、静岡特産の製品の特徴は、

- ① 他産地では平ひごを用いるのに対して、静岡では丸ひごを使う。
- ② ひごの使い方が、他産地ではすべて平ひごを編んで作る技法に対し、静岡では一本一本ひごを組み千筋にする。
- ③ 竹ひごを輪に曲げるのに独特の技法を持ち、それを駆使している。
- ④ 輪の部分とつなぎ方に継ぎ手という独自の技法を用いている。
- ⑤ 一人の職人が技法を駆使し、仕上げまで九分通り作り上げる。
などが挙げられます。